

偏見の先に

大阪医療技術学園専門学校

中野 桜

正直、私は精神・知的障がいがある人が苦手でした。もちろん、理由があります。小・中学生の頃に近所に知的障がいがある男性が住んでいました。その人が苦手だったのです。10代であろう女の子には必ず挨拶をしてくるところ、挨拶を返さなければ殴られるという噂までたっていたこと。もちろん、そんな事件が実際に起こったことはありません。

しかし、そんな噂がたってしまうほどにみんな彼を恐れていました。私もその一人で、彼に挨拶をされたときは殺されるんじゃないかという恐怖で必死に挨拶を返していました。そして、私の叔母にも知的障がいがあります。例の男性ほどではありませんが、幼いころは叔母が怖くよく分からない大人だと思っていました。心無い言葉に、子供ながらに傷ついたこともありました。「正直、苦手。」これが、今までの私の正直な意見です。

ですが、21歳になった今、以前のような偏見や恐怖心がなくなりました。知識がついたこと、自分が大人になり体も大きくなったことなど。私自身の変化による理由もありますが、私の気づかぬうちに心の底にあった偏見が覆される出来事がありました。それは、実際に障がいがある人と関わることによって起きたことです。

ひとつめは、祖母の家で障がいがある叔母に言われたひとことです。当時の私は摂食障がいになり自分の容姿が嫌いで嫌いでたまりませんでした。そのせいで人と会うことを避け引きこもりがちになっていました。そんな中、私なりに勇気を出して祖母の家に行きました。小さいころから関わってきた叔母です。昔は心無い、私の容姿についての言葉をかけられたこともありました。正直、今の体で叔母に会うことが不安でした。

そんな私の不安をよそに、叔母がかけてくれた言葉。それが、「綺麗なな」でした。「なんか今日、綺麗なな」。そう言う叔母に、「今日だけか」と祖母は笑っていました。私も笑いました。愛想笑いなんかではありません。本当に、笑いました。

ふたつめは、バイト先で一緒に働いている障がいのある男性スタッフとの出来事です。出会ったば

かりのころは高圧的で苦手でしたが、一緒に働き仲が深まるにつれ彼の笑顔が増えました。「これ、やっておきました!」「体にお気を付けて!」彼は笑顔でそう言ってくれます。

そんな優しい彼ですが、新人の子に対してはやはり高圧的になります。新人さんが彼のことを悪く言うたびに「ああ、違うのにな」と複雑な気持ちになります。

みつつめは、冒頭で書いていた挨拶をしてくる知的障がいのある男性です。昔は本当に怖かった彼。大人になった今、彼が私に挨拶をしてくることもなくなりました。そして、今になってからその彼と関わる場面があるのです。

私は小学生のころと同じ地元で、アルバイトをしています。私が働いているお店に、彼はお客さんとして訪れます。働き始めたばかりの頃、初めて彼を見たときは久しぶりに昔の恐怖心を思い出し、緊張しました。彼が私のレジへ来たときは正直怖かったです。ですが、これも無駄な心配でした。彼はとても礼儀正しく、最後には私に礼を言い去っていきました。彼はとても独り言が多く、声も大きいです。今の私でも、障がいに対する多少の知識すらなければ「怖かった。変な人。」で終わっていたんじゃないかと思います。

ほかにも、障がいがある人たちとの関わりの中で私の偏見が消えていった出来事はたくさんあります。『偏見の先に』。自分の凝り固まった考え方を自分自身で変えることはとても難しいです。変える気すらない人たちもたくさんいます。悲しいですが、本当のことです。昔の私もそのひとりでした。

そんな人たちに偏見の先を見てもらうには、やはり障がいがある方々との関わりしかないのだと思います。そんなに難しい知識なんてなくても、関わりのなかで彼らの優しさや純粋さが見えてくるはずです。私は卒業したら福祉系の仕事に就きます。実際、私自身がどう行動すれば人々の偏見が消えていくのかは、まだ分かりません。

ですが、障がいがある人と共に過ごしていく中でその場面に出会えると信じています。人々の偏見がなくなっていく瞬間を、この目でたくさん見ていきたいです。